

P-201 腫瘍マーカー、proGRPの臨床的有用性

浜松医科大学第一外科¹, 同・第二内科², 榛原総合病院呼吸器外科³, 磐田市立総合病院呼吸器外科⁴, 焼津市立総合病院外科⁵, 藤枝市立総合病院呼吸器外科⁶

○北 雄介¹, 影山善彦¹, 野木村宏¹, 鈴木一也¹
原田幸雄¹, 早川啓史², 千田金吾², 佐藤篤彦²
大井 諭³, 堀口倫博³, 豊田 太⁴, 小林 亮⁵
杉村久雄⁶, 関谷 洋⁶

Gastrin-releasing peptide (GRP)は、ガストリンの分泌を促進する脳腸ペプチドで、proGRPはその前駆体であり、肺小細胞癌のマーカーである。診断、治療効果判定における有用性を調べた。

肺小細胞癌12例(内、治療前9例)と、他の肺、縦隔疾患32例について、入院時にproGRPを測定。前者では、6.6~4540pg/ml(平均494)。過去に治療歴の無い例に限れば、10.2~4540pg/ml(平均655)であり、cut off値46.0未満には2例が含まれた。

一方、コントロール群(肺腺癌10、扁平上皮癌8、大細胞癌2、転移性肺癌2、肺良性腫瘍5、縦隔腫瘍;良性2、悪性3)では、5.0以下~35.1pg/mlと総て陰性。

治療前後での比較では、手術後、肝転移が多発した1例で上昇を認めた以外、軒並み低下した。原発巣を放射線治療後、頸部リンパ節転移等にて入院した例では13.9pg/mlと低値であった。

proGRPは肺小細胞癌の診断に大変有用であるが、治療後の再発、転移には、他のマーカーや画像の併用が必要と考えられた。

P-203 CYFRA21-1の悪性胸膜中皮腫診断における有用性について

呉共済病院・内科¹、同・病理科²

○丸川将臣¹、肥山淳一郎¹、塩田雄太郎¹、小野哲也¹
佐々木なおみ²、谷山清己²、真柴裕人¹

【目的】CYFRA21-1(以下シフラ)はサイトケラチン19フラグメントを認識する腫瘍マーカーとして注目されているが、今回、悪性胸膜中皮腫5例について血清、胸水中のシフラの測定を行い、その有用性について検討した。【対象】悪性胸膜中皮腫4例(二相性3例、上皮性1例)、良性胸水症例15例(肺結核8例、肺炎付随胸水3例、肝硬変3例、心不全1例)について胸水中のシフラの測定を行い、また、悪性胸膜中皮腫症例5例(二相性1例追加)について血清中シフラの測定を行った。【結果】良性疾患における胸水中シフラの平均値は11.6±11.2ng/mlであり、悪性中皮腫症例の平均値は812.5±552.4ng/mlであり、カットオフ値を35.0ng/mlと設定すると4例はいずれも陽性となった。また、血清中の測定では5例中2例が3.5ng/ml以上の高値を示し、更にこの2例については病気の増悪と共にシフラの上昇を認めた。【考察】以前より悪性胸膜中皮腫の診断にヒアルロン酸の測定が有用であると言われているが、今回の結果は血清中あるいは胸水中のシフラの測定が悪性胸膜中皮腫診断、経過観察にきわめて有用であることを示したものと考えられた。

【結語】シフラは悪性胸膜中皮腫の新しい腫瘍マーカーになりうると考えられた。

P-202 胸水中Pro-GRP値の臨床的検討

県立愛知病院内科

○斉藤博、花岡葉子、奥野元保、大宜見辰雄、有吉寛

【目的】胸水中のPro-GRP値測定の臨床的意義をNSE値と比較し検討した。

【対象と方法】肺癌による癌性胸水27例(小細胞癌5例、非小細胞癌22例)、非癌性胸水22例を対象とした。Pro-GRPはELISA法で、NSEはEIA法でそれぞれ測定した。

【結果】胸水中Pro-GRP値は小細胞癌で2451.2±2669.4 pg/ml、非小細胞癌で32.1±64.1pg/ml、非癌性疾患で15.0±7.3 pg/mlで、小細胞癌で有意(P=0.0003)に高値を示した。胸水中NSE値は小細胞癌で20.8±24.8 ng/ml、非小細胞癌で8.0±11.3 ng/ml、非癌性疾患で6.3±5.7 ng/mlで、小細胞癌で有意に(P<0.05)に高値を示した。

【考察】胸水中のPro-GRP値測定は小細胞癌による胸水と非小細胞癌や非癌性疾患による胸水の鑑別に有用であることが示唆された。

P-204 気管支洗浄液中のCYFRA21-1測定の肺癌補助的診断としての有用性

神戸労災病院内科

○八幡知之、土屋貴昭、竹原木綿子、辻本 豪、福原正博、大西一男、足立和彦

【目的】CYFRA21-1は非小細胞肺癌において感度、特異度とも優れた腫瘍マーカーである。気管支洗浄液中のCYFRA21-1測定が肺癌診断に有用であるか否か、CEA, SCC, CA19-9, SLXとの比較も加えて検討した。

【対象】無治療の肺癌15例(以下LK群, 扁平上皮癌7例, 腺癌5例, 小細胞癌3例)、肺野の異常陰影を伴った肺癌以外の20例(以下NLK群, 肺感染症11例, 転移性肺癌2例, 塵肺症2例, 過誤腫2例, 過敏性肺臓炎, 強皮症肺, DPB各1例)。

【方法】気管支鏡施行時、curettage, TBB, TBLBetcを行った後責任病巣のある気管支に生食を30ml注入し洗浄液を採取し、SRLにてEIA法でCYFRA21-1を測定した。

【結果】CYFRA21-1はLK群310.7±365.6、NLK群96.8±190.0でLK群で有意に高値であった(P<0.05)。CEA(LK群22.9±44.7, NLK群6.8±12.9)、SCC(LK群62.7±53.9, NLK群208.4±307.5)、CA19-9(LK群4419.0±7998.6, NLK群629.1±1801.0) SLX(LK群761.9±1441.3, NLK群1540.7±3299.1)は両群間で有意差を認めなかった。

【結論】気管支洗浄液中のCYFRA21-1測定は肺癌補助的診断に有用である可能性が示唆された。